

書誌から見た昭和時代（戦後）のワイ
ルド受容——吉田健一を中心に——

佐々木 隆

2008年4月

日欧比較文化研究 第9号

日欧比較文化研究会

書誌から見た昭和時代（戦後）のワイルド受容

——吉田健一を中心に——

佐々木 隆

プロローグ

昭和時代も戦後になると、まずは国の復興が最優先となった。かつて、明治時代の西欧化の時期にも、殖産工業を中心に物質文明主義が世の中をつき動かしていた中、物質文明ではなく人間の精神面を重視し、芸術至上主義のワイルドが本間久雄を中心に紹介された。同様に昭和 20・30 年代はまさに、戦後の復興期と高度経済成長期という物質面が優先する時代の中、再びワイルドが脚光を浴びた。ワイルド没後 50 周年の 1950 年（昭和 25）には三島由紀夫「オスカア・ワイルド論」（『改造文芸』第 3 巻第 4 号）、1960 年（昭和 35）の三島由紀夫演出『サロメ』（文学座）上演、ワイルド没後 75 周年の 1975 年（昭和 50）には日本ワイルド協会の設立をはじめ、1980 年（昭和 55）から翌年にかけて、また 1988 年（昭和 63）から翌年にかけて西村孝次が 2 度にわたり個人訳の全集に挑んだ『オスカア・ワイルド全集』が刊行されるなど、日本におけるワイルド研究の重要な時期が到来したのである。

昭和時代における日本のワイルド受容を見るには、1975 年（昭和 50）の日本ワイルド協会設立が大きなターニング・ポイントとなっている。こうした中で「近代はオスカア・ワイルドから始る」の名言を残した吉田健一を中心に取り上げることにする。

1 吉田健一の生涯

吉田健一（1912-1977）は翻訳家、評論家、英文学者、小説家として知られている。父はイタリア大使館三等書記官吉田茂（後の内閣総理大臣）、母・雪子は牧野伸顕（内大臣）の娘である。健一は大久

保利通の曾孫にあたる。1918年（大正7）に学習院初等科に入学したが、父・茂に同行して、青島、パリ、ロンドン、天津、そして1925年（大正14）に帰国し、暁星中学2年に編入した。その後1930年（昭和5）にはケンブリッジ大学キングズ・コレッジに入学したが、1931年（昭和6）急遽帰国し、アテネ・フランセにも入り、1935年（昭和10）に卒業した。（カッコ内は筆者による追加）

河上（徹太郎）のすすめでアテネ・フランセのフランス語の全課程を修了、ラテン語とギリシア語のクラスにも出た健一は、河上周辺の横光利一、青山二郎、小林秀雄らと知り合う。なかでも横光利一は、たまたまその近くに移り住んだため、その家をしばしば訪れた。⁽¹⁾

1939年（昭和14）に、伊藤信吉、山本健吉、中村光夫等と『批評』を創刊。1963年（昭和38）から1969年（昭和44）まで中央大学文学部教授を務めた。特に留学中の吉田健一については、以下のようなことが伝えられているので、紹介しておきたい。

「現在の若い英国人であれほど美しい英語を話せる人を知らない」と、ドナルド・キーンを感嘆させた彼の英語力は、六歳のときからはじまる七年間にわたるこの外地生活において形成されたものであり、ケンブリッジ留学がそれを完成させた。⁽²⁾

吉田のケンブリッジ大学での留学生活は短かったが、その成果は木帰国後、エドガー・アラン・ポー(Edgar Allan Poe, 1809-1949)、ポール・ヴァレリー(Paul Valéry, 1871-1945)に関する翻訳に取り組んだところから始まるのである。

2 吉田健一のおもな著作

1935年（昭和10）11月のアラン・ポー／吉田健一訳『覚書 マルジナリア』（芝書店）、1947年（昭和22）11月のラフォルグ／吉田健一訳『ハムレット異聞』（角川書店）、1948年（昭和23）6月のペイタア／吉田健一訳「ルネッサンス」（角川書店）、1948年（昭和23）8月のキエルケゴール／吉田健一・堀田善衛共訳『追憶の哲理』（大地書店）、1948年（昭和23）11月のジョンソン／吉田健一訳『シェイクスピア論』（思索社）、1950年（昭和25）4月のオーウェル／吉田健一、龍口直太郎共訳『1984』（文藝春秋社）、1950年（昭和25）9月～10月にD.H. ロレンス／吉田健一訳『息子と恋人』（上中下）（小山書店）、1951年（昭和26）1月のルイス・キャロル／吉田健一訳『ふしぎな国のアリス』（小山書店）等の翻訳がある。また、1959年（昭和34）1月～10月には翻訳で『エリオット選集』（5冊）（彌生書房）なども忘れることはできない。

また、これ以外にも吉田自身の作品としては、1949年（昭和24）7月の『英国の文学』（雄鶏社）、1955年（昭和30）5月の『東西文学論』（新潮社）、1956年（昭和31）5月の『文学あちらこちら』（東方社）、1957年（昭和32）5月の『文学人生案内』（東京創元社）、1957年（昭和32）10月の『近代文学論』（垂水書房）、1959年（昭和34）10月の『英国の近代文学』（垂水書房）等、枚挙に暇がない。その後は1970年（昭和45）10月の『ヨオロッパの世紀末』（新潮社）により第23回野間文学賞を受賞している。

吉田は、翻訳を通して英米文学を知り、その後、作家論を展開することとなるのだ。

3 吉田健一のワイルド論

吉田健一は1949年（昭和24）6月に『あるびよん』（創刊号）に「英国の近代文学」、1951年（昭和26）6月のワイルド／吉田健一

訳『藝術論——藝術家としての批評家』（要書房）、1955年（昭和30）6月の『英語青年』（第101号第6号）に「オスカア・ワイルド」の文章を寄せ、1957年（昭和32）2月に『文学界』（第11巻第号）に「近代文学論 創造の中のもう一つの創造、『批評について』」を発表した。この論文は同年10月に『近代文学論』（垂水書房）に「ワイルド」の標題で収録され、1959年（昭和34）10月にも『英國の近代文学』（垂水書房）にも収録された。また、1972年（昭和47）1月にも「ワイルドの批評」（『中央公論』第67巻第1号）を寄せている。

「英國の近代文学」の冒頭は

英國の近代文学は、第一次世界大戦が終つた一九一八年から始るとするよりもやはり英國の文学が辿つて来た、独自の發達の経路を考慮に入れて、十九世紀より二十世紀に移行する期間に生じた勢を得た文学界の傾向と見る方が正確である。⁽³⁾

である。ワイルドへの言及は

英國的な生活様式の完成や、その反面である田舎臭さはこの結果であり、これは文学にも反映されてゐる。この傾向は、ペイターやワイルドの評論、又ワイルドを中心に起こつた頽廢派の文学運動などで、十九世紀末に至つて著しい変化を示し始めた。⁽⁴⁾

である。

高橋智子によれば吉田健一が「近代論」を本格的に打ち出したのは、1939年（昭和14）年1月に『文学界』に発表した「ラフォルグ論」である。⁽⁵⁾ さらに、吉田の「近代」論については次のように述べている。

近代を状態としてとらえ、複数の近代を想定するという考え方は、吉田の〈近代〉論の出発時から存在しなかった。吉田がこの考えを手に入れるためには、ヴァレリーやラフォルク、ボードレーなどから触発されるだけでなく、それとは全く別のファクターが必要だった。太平洋戦争中に書かれた〈近代〉論は、時局の影響をにじませた偏向した論とも読めるが、この時に得たヨーロッパを相対化する東洋、日本への視線があったからこそ、単なる歴史上の一時期ではない状態としての〈近代〉を発見した得たことも確かである。そして、ワイルド『芸術論』の翻訳という契機を経て、吉田は歴史的な一時期ではなく、歴史上何回でも出現するある状態として〈近代〉概念を完成させるのである。⁽⁶⁾

一般的に近代と言えば、西欧ではルネサンス以降、日本では明治維新以後の一時期を示すが、吉田健一は

近代はプトレマイオス王朝下のアレクサンドリアにもトラヤヌス帝治下のロオマにもあった⁽⁷⁾

と述べているように歴史上、何回でも繰り返し現れる状態としてとらえていることがわかる。「英國では、近代はワイルドから始る」⁽⁸⁾で知られる「近代文学論」は、

一つの時代がいつから始まるのか、又それ以上に誰からかを決めることは簡単ではないと考へられて、それを例へば、ルネサンスと中世紀の区別に就て幾らも説を立てることが出来るのである⁽⁹⁾

と、続くのである。そして、近代の性格とは「混乱」であるとしている。

混乱は、凡てのものにその秩序を論理的に追究して発達して来たヨーロッパの文明が、それが遂に一つの秩序をなすに至るものであるかないかとは関係なしに追及を続けた為に陥った混乱であって、秩序を求める意志は初めから少しも変わらず、たださうして開拓した個個の世界が各自の方向に従って分離するばかりに起こった状態は決定的なものだつた。⁽¹⁰⁾

さて、吉田は「近代文学論」では次のような小項目を設定している。なお、この小項目は1939年（昭和14）1月の『文学界』に掲載されているときには設定されていたものの、その後はこの小項目の見出しはなくなっている。

近代の混乱と豊富
近代に表現を与へたワイルド
批評は創造的な藝術か
近代以前の近代
認識が存在となる近代文学
エリオットとワイルド
近代小説の運命
人間再建の時代・現代

この中で「近代に表現を与へたワイルド」の中で次のように述べている。

近代文學は彼からであつて、それが今から百數十年の前のことであるから、文學は多くの場合に時代に先驅するとも言へる。ポオがしたことは、文學を他のものの世界から切り離して文學の世界を獨立させることだつた。(11)

ワイルドがしたことについては、ペイタアとワイルドの相違の中で次のように述べている。

ペイタアとワイルドの相違は、逆説の形を取るまでに簡潔で要を得たワイルドの近代的な文體とペイタアの、正確と微妙を帰しながらも、まだその他に文章には内容を離れて守るべき文章の形式があるといふ觀念に引き摺られた、中途半端な言ひ廻しを比較して見ても解る。もしワイルドがペイタアに何か教わつたことがあるとすれば、それはワイルドも語つてゐるやうに、ペイタアが彼に詩を書くことよりも困難な散文の分野を開拓することを勧めたことである。(12)

ワイルドはペイタアが言ったことを実践したのである。

出来上がった文章に適宜に内容お嵌め込む代わりに、自分が語るべきことの性質を考へ、それと結合する他ない言葉を探すことで言葉を完全に生かすことだつた。そしてワイルドがそれを最初に実践した。(13)

「批評は創造的な芸術か」では次ように述べている。

ワイルドは今日でもまだ寧ろ劇作家、又「ドリアン・グレイ

の肖像畫」などを書いた小説家といふことで知られてゐる。併しワイルドに就て語るのに必要なのは「意向集」と題する評論集に収められた「藝術家としての批評家」といふ對話だけであつて、これがあれば彼が英國の近代文學の始祖であることを示すのに足りる。(14)

『英國の近代文學』については次のような経緯がある。

『英國の近代文學』は、はじめ書きおろしとして計画されたが、結局、雑誌その他に分載というかたちになり、また早い時期に、ワイルドからストレッチェイまでの批評家を論じたはじめの五章だけが『近代文學論』に収められた。『近代文學論』の「後記」に、次のようにある。

英國の近代文學を読み漁つてゐるうちに、その印象を纏めて書きたくなつて、兎に角、その中え批評を扱つた部分がワイルドからストレッチェイに至る本書の各章である。何れ詩と、次には小説を取り上げて一冊の本にする積もりである。(15)

吉田の一連のワイルド論で最初の頃のものゝ 1955 年（昭和 30）6 月の「オスカア・ワイルド」（『英語青年』第 101 卷第 6 号）、後半のものゝ 1972 年（昭和 47）1 月の「ワイルドの批評」（『中央公論』第 87 卷第 1 号）がある。

「オスカア・ワイルド」は、吉田が 1951 年（昭和 26）6 月に『藝術論——藝術家としての批評家』（要書房）を翻訳として発表し、後に、まさに「藝術家としての批評家」に注目したものである。

ポオに劣らずワイルドにとつても、文章を書くというのは言葉

を選択することであり、従つてそれは批評することだつた。凡ては批評であり、凡て文学の仕事に携るものは批評家でなければならぬというのは、近代という分析的な一時代の元祖であるポオに始まつたことかも知れないが、それに文章で最初にはつきりした表現を与えた所に、ワイルドの仕事が文学史上に持つ画期的な意味がある。ここでは勿論、彼の「芸術家としての批評家」という論文のことを言つているのである。⁽¹⁶⁾

吉田はさらに「芸術家としての批評家」について以下のように述べている。

ワイルドがこの論文で語つている、批評こそ芸術家にとって最も本質的な活動であり、従つて芸術の基本的な形式でもあるという態度は、勿論、何ごとに付けても分析的になつた近代人の精神に残された創造への唯一の活路であり、従つて近代人にとって最も必要な一つの真実に基づいたものであつてそれ故にこれはその後、凡ての近代的な芸術論の常識になつて、ワイルド（及び、ワイルドを教えたペイター）に反対することを看板にしているエリオットも、ワイルドがその芸術論で指摘した幾つかの事実から出発しなければ、彼自身の批評を展開させることが出来ない状態に置かれている。最も具体的な例を挙げれば、エリオットが「伝統と個人的な才能」で説いている伝統の観念や、芸術作品を創造する過程では、個性が没却されるという考えは、ワイルドの「芸術家としての批評家」を読んだものには別に新奇な発言とも思えない筈である。その上に、エリオットはワイルドに楯突く必要からか、個性を没却した芸術家の非人間的な面を強調する点で極端に走つている。つまり、彼がワイルドに反対した箇所が、彼の批評のつまらない部分にな

っているのである。(17)

さらに、最後の方でも次の様に述べている。

ここでは、芸術の世界では表現は再現であるという、近代に至つて改めて認識された一つの真実（それがエリオットの伝統論の出発点でもある）が説明されているだけではなくて、このことが文学上の現実としてここに再現されているのであり、従つてこれは言はば、芸術そのものが取り得る最も近代的な表現であつて、それ故にこのワイルドの論文は芸術論であると同時に一流の芸術作品なのだというのが、この一篇を貫いている論旨であつて、これが書かれた時代を思えば、この「芸術家としての批評家」は凡ての近代論の先駆をなすものである。(18)

吉田のワイルド論の原点をここに見ることができよう。

「ワイルドの批評」では以下のような記述がある。

「嘘の衰退」、「ペンと鉛筆と毒」、「芸術家としての批評家」、及び「仮面の真実」という四つの批評を収めた本だと言った方が自然に思われる。要するにこれはそういう文芸評論集であつて、それが同時にワイルドが書いたものの中での傑作でもある。

近代、或いはヨオロッパの十九世紀末に批評が発達したのについてはそれだけの理由があつた。今日の日本で考えさせられるという言葉がよく使われるのを見るんは、それで自分でものを考えることをしなくなった人間が殖えたことを示すものに過ぎないが、それとは別な意味で考えざるを得ない環境にあれば人間は考えることになり、その考えるということと批評するのは同義語である。(19)

吉田はさらに続けている。

「芸術家としての批評家」の趣旨は要するに文学が究極に取る形が批評である他ないのみならずもっと広く見て精神は批評する形で働くということにあるが、ここで語られているのはただそれだけではない。⁽²⁰⁾

4 その他

1949年（昭和24）7月の『英國の文学』（雄鶏社）の「IX 十九世紀の文学」に注目しておきたい。ワイルドについては次のように述べている。

ペイタアの弟子にワイルドがいる。しかしワイルドはホップキンスとともに、明らかに英国の近代文学に属する人間であるのみならず、正当にその始祖と呼べる位置にあって、ここで彼について語ることはできない。⁽²¹⁾

この吉田の姿勢について高松雄一（b. 1929）は「解説」中で次のように述べている。

本書のなかでは、折にふれて英國の文学とフランスの近代文学の比較が行われる。一方で、著書が英国の「近代文学」に属すると考えるホプキンス、ワイルド、モダニズムの文学者たちなどは考察の対象から省かれる。明らかにある規準が設定されているのだ。必ずしも年代による区別でないのは、ハウスマンやフォースターは論じられているのに、同時代のイエイツやジョイスは除外されたことから解る。著者の他の著作を参照した

上で、この「近代文学」の性格を取って要約すること、社会の有用な構成員であることを止めた余計者の文学者たちが自分独自の価値判断に基づいて書いた、常に純粹詩を志向する文学であり、ヨーロッパの場合はポーからボードレル、フランス象徴主義、ヴァレリーへ、イギリスの場合にはホプキンス、ワイルドからモダニズムへ、という系譜を考えることができる。著者がこれらについて徹底した解明を試みているのは、『英國の近代文学』『近代詩について』『文学概論』、『ヨオロッパの世紀末』ほかに見る通りで、無関心故に本書から除外したのではない。
(22)

吉田のワイルド論を考える上で重要な指摘であろう。

エピローグ

吉田のワイルド論は「芸術家としての批評家」に集約されるといってもよいだろう。吉田が『英國の文学』でワイルドを扱わなかった理由のひとつに「近代」の問題がある。「科学の発達による実證的な精神の普及」⁽²³⁾により、精神が人間の認識の上に置かれるものになった。そこには自意識があり、「批評の問題」⁽²⁴⁾ともなる。

吉田は次のように述べている。

それまで言葉を問題にするのが批評家であり、靈感や、人間の社会を描写したい気持でものを書くのが詩人や小説家だった。併し靈感といふものが退けられて、方法、つまり、言葉の工夫がそれにとつて代われれば、文學の仕事をするものは先ず、批評することから始めなければならなくなる。⁽²⁵⁾

吉田は文學の仕事をする者の態度については以下のように述べているのである。

文學の仕事をするものは文學のみにみらず、自分が生きてゐる時代に對しても自分の態度を決定する為には、先ずその時代の性格を理解しなければならない。或は、仕事をする前にその仕事をしてゐる時代を知る他なくするのが、近代といふ時代の性格なのである。⁽²⁶⁾

ワイルドが *De Profundis* (1905) の中で述べた “I was a man who stood in symbolic relations to the art and culture of my age.”⁽²⁷⁾ と呼応するのではないだろうか。ワイルドはまさに 19 世紀という時代の中であって自分の位置づけを見据えた批評家であったのだ。

参考文献

近藤信行「年譜——吉田健一」（吉田健一『英語と英国と英国人』講談社、1992年5月）

高橋智子「吉田健一参考文献目録」（『日本女子大学紀要 文学部』第51号、日本女子大学、2002年3月）

注

(1) 清水徹『吉田健一の時間』（水声社、2003年9月）、p.44.

(2) 清水徹編『吉田健一』（新潮日本文学アルバム）（新潮社、1995年12月）、p.14.

(3) 吉田健一「英國の近代文学」（『あるびよん』創刊号、新月社、1949年6月）、p.23.

- (4) Ibid., p.26.
- (5) 高橋智子「吉田健一の〈近代〉——概念の生成と展開について」(『国語と国文学』第76巻第1号、東京大学国語国文学、1999年1月)、p.44.
- (6) Ibid., p.55.
- (7) 吉田健一「詩と近代」(『吉田健一著作集』第25巻、集英社、1980年10月)、p.7.
- (8) 吉田健一「近代文学論」(『文学界』第2月号、文芸春秋社、1957年2月)、p.154.
- (9) Ditto.
- (10) Ditto.
- (11) Ibid., p.155.
- (12) Ibid., p.156.
- (13) Ditto.
- (14) Ibid., p.157.
- (15) 吉田健一『吉田健一著作集』(第7巻)(集英社、1979年4月)、pp.402-403.
- (16) 吉田健一「オスカア・ワイルド」(『英語青年』第101巻第6号、1955年6月)、pp.253-254.
- (17) p.254.
- (18) p.254
- (19) 吉田健一「ワイルドの批評」(『中央公論』第67巻第1号、中央公論社、1972年1月)、p.329.
- (20) Ibid., p.331.
- (21) 吉田健一『英国の文学』(岩波書店、1994年8月)、p.229.
- (22) Ibid., pp.250-251
- (23) 吉田健一「近代文学論」、p.155.
- (24) Ditto.

(25) pp.157.

(26) pp.159

(27) With an Introduction by Vyvyan Holland. *Complete Works of Oscar Wilde* (New York: Harper & Row, 1989), p.912.

キーワード：ワイルド、吉田健一、近代、批評